



「昔話を追いかけて」

のむら けいこ
野村 敬子

1938年(昭和13年)
山形県最上郡生まれ、
南小岩在住



話を聴き続けて

民俗学者の柳田國男先生の造語で、「^{さいほう}採訪」という調査方法があるんです。訪問して、話を聴かせていただいて、書き残します。風土から人柄というのまで民俗全体を学ぶものです。私はこれを聴き耳と呼んでいます。昭和33年に昔話や民話を聴き始めて、60年近く続けてきました。

耳の記憶ってすごいんですよ。平成22年に区立中央図書館で語っていた女性の昔話が、45年前に新潟で聴いた女性の語りと、節やリズム、間が同じなの。45年前に語っていた女性の娘さんだったのね、中野ミツさん。これがご縁で、平成23年にミツさんの昔話を聴く会を始めました。そして、25年には江戸風鈴の^{よしほる}篠原儀治さんの話を聴き、強く惹きつけられました。結局、お二人の話を聴いて、それぞれ本を出させていただきました。

夫は学問の友たち

私は、山形県最上郡真室川^{まがみ まむろがわ}で生まれました。父近岡富治、母キノ。姉2人弟1人で、昭和13年の寅年です。家は米屋で、酒や飼料も扱っていました。地元の小中学校を出て、母の母校である新庄市の高等学校に通っていました。姉たちの出た山形の大学に行こうと思っていたら、先生が「東京に行った方がいいぞ。夢はもっと大きく」って。でも、東京は親戚もなく、まったく知らない土地でした。

大学は渋谷にありました。本が好きだから、たくさん本を読んで国語の先生になろうと日本文学科に入りました。昭和32年です。

大学に入った頃は『源氏物語』を勉強していたけれど、2年生のとき説話研究会に入って『今昔物語』を勉強したら、庶民の暮らしがおもしろくなってきた。説話って、庶民文芸。口伝えや、書き物で伝えられてきた昔話や伝説、神話や世間話のことです。

そういえば、当時の私のあだ名は「トマト」で、体重が65kgありました。「近岡さん改札口通れるか」と言ったのが、高校に勤めていて、よく説話研究会に顔を出していた3歳年上の先輩。今ではセクハラですよ。仕事が終わる

とやってきて、学問的な指導というんでしょうか、難しいことをいろいろ言うんですよ。それで卒業生のくせに威張っているんです。大学院生とよく議論していました。子どもの2、3人いるような老けた感じの人でしたよ。その人が、私の夫になりました。

その頃の女性は、田舎に帰れば労働力としての嫁さん。学校の先生方も朝、畑仕事をしてから学校に通ってきていました。私はそういうのを見ていましたから、卒業して家に帰るより、東京にいたほうが新しい生き方ができるのではないかと思っていました。卒業の時「東京に住みたい」と相談した先生が仲人になり、「人ではなく場所」で選んだのが夫です。今考えると、長男の嫁ですよ、誰も来る人がいなかったのですね。

昭和36年、地図会社に就職しましたが、婚約を理由に2か月で辞め、結婚までの2年間実家に戻りました。夫は書いてあるものを頼りにする学問から、口や言葉で伝えられてきた口承文芸を学びたいと、私の実家にやって来ました。近辺をフィールドにして、テープレコーダーを持って昔話の採訪です。録音したものを文字にするのは私。私は聴いたことなかったけど、夫が尋ねると、親が昔話を語るわ、語るわ。両親が婿さんには一生懸命でした。

昭和38年に結婚して、神奈川県相模原市で暮らし始めました。夫の家にはまだ姉弟が大勢いたからです。結婚の土産は実家にいた2年間の採訪で得た昔話。親からの結婚資金は研究に使いました。安物の家具を見た親はびっくりして怒りましたね。でも日本の隅々までの調査にはお金がかかるんです。私の人生、タンズで勝負するわけではないんだから、ごめんなさいって。

昭和43年、息子の入園をきっかけに小岩の夫の実家に入りました。夫の両親と妹2人、弟1人が居て、家族が8人になりました。私も大家族で育っていたのでにぎやかで嬉しかったですね。

息子をよく採訪に連れていきました。6年生の時、作文に「頼まれもしないのに上がりこんで話を聴く。ぼくは父さんのようなことはしたくない」と書いたものです。でもその息子も、私たちの母校に入って、説話研究会に。今は他の大学で教えながら、口承文芸を研究しています。

憎たらしいこともいろいろありましたけれど、夫のおかげ

で採訪しながら全国を旅しました。平成19年、夫は72歳で亡くなりました。翌年に夫の母が亡くなる時は、息子が「本当はパパがやらなきゃならなかったのに」と、姑の頬を最後まで両手で触ってくれました。大家族で育ててもらったおかげです。

昔話と女性

嫁さんはどうして朝早く起きなければいけないの。新聞を1番に読んで悪いの。風呂の順番も、商売をやっていた実家では手のすいた人から入っていましたが、ここでは嫁は最後。姑は1年に1度しか美容院に行きませんでしたので「はい、私も」と、髪の毛を後ろでぐるぐるってだんごにして、いつも地味な同じような服を着ていました。

私の実家は嫁さんというものを知らなかったのです。姉は学校の先生、婿養子は役場に勤めている。婿取りの女性と米屋の母親を見ているから、みんな自立していて偉いじゃない。「嫁さんはどうしてこうなんだろう」が、女性民俗学研究会で勉強するきっかけでした。柳田先生の作った会で、女性会員しかいないの。男性は柳田先生だけの研究会。昭和53年、40歳の時です。

学ぼうちに、納得はしませんが、「あっそうだったのか」と思うことがたくさんありました。嫁というのは働き手なんですね。手替わり、つまり新しい働き手を貰っておめでとうございますというお祝いもあるくらいです。それは自分が知らなかっただけで、女性民俗学というのは、そういう勉強をするんですね。昔の人はそれをやってきたと。そこで見つけた研究テーマが「女性と昔話」です。

最初はお産の研究。昔は産婆さんが昔話を語っていた。「産屋の夜とぎ」っていうの。産屋はお産の場所。お産は長い時間かかります。そうすると産前産後ずうと人がいるでしょ。今は無いけれど昔はね、お産なんか病気じゃないから村中の人が集まってきてね。そこには昔話とは限らず、さまざまな語らいがあり、なかでも笑い話がいっぱいあった。平安時代の『餓鬼草子』という絵巻では、みんながお産の周りで口あけて笑っているんです。

20年前に、新聞で「嫁も姑も病んでいる」という記事を見ました。故郷山形の国際結婚でした。日本に慣れる慣れる。母国語を話すな。子守唄も日本の言葉で歌え。でもその嫁の母国にも子育ての文化がある。語り伝えられてきた話があるはず。私のできることは昔話を聴くことです。そして、外国人女性たちの母国の物語を紹介することで理解し合ってほしいと思い、平成元年に山形弁でフィリピンの民話を語る絵本を出しました。これが縁で韓国と台湾の本も出しました。

孤独で、生きるのに困難な人がいるでしょう。そういう人に対面して昔話を聞かれます。世界中の人びとが平等に持っている民話を世の中に提示することで、文化を伝えていく。昔話を追いかけることは、人間の生命の姿を追いかけるということだと思います。

私の夢とこれから

私の昔話のベースキャンプは山形の実家です。昔は米を扱っている実家にはいろんな人が出入りしていました。お米を作るための行事は一年中あり、集まって話をする機会があるので。人にも生まれてから死ぬまで、人生儀礼があり、節目にまつわる昔話があるんです。

かつて、じいちゃん、ばあちゃんを集めて真室川の全小学校の5、6年生200人ぐらいに昔話を聴かせました。それを13年間やりました。私自身、小さい時に姉弟で「頭の中に口があって…」(飯かね女房)を聞いたけど、覚えているのは私一人だけなの。好きなので忘れない。だからその小学生のなかにも、将来語る人が出てくる。あの子どもたちが高齢者になるまで昔話は大丈夫。本で読んだものと違って、耳で聴き、声に出して語ったものはよく覚えているものだからね。



◆下小岩会館で活動中の野村さん(中央)

現在、栃木県の短期大学に講師として勤めています。12年になります。仲人をしてくださった恩師白田甚五郎先生が教えておられました。伝承文学を教育としてやっているのです。先生が辞められて、私に声がかかりました。夫が亡くなってみると、結局夫の夢を引き継いで、同じ道を歩いているということになりますね。

家に採訪で得た日本の昔話の資料が50年分あるんですよ。その資料を栃木へ持っていき、夫の本と資料も全部出して、日本の昔話を発信するところを作りたい。オープンにして皆さんに見てもらいたい。これは夫の夢でした。

私の旅は人に会う旅でした。会って話を聴く。会うと話者の深層のようところが見えてきました。昔話というものはすごく内面的なものです。ですから、なるべくその方の語った語り口のまま残してあげたい。私の人生は、人の生命と共にある昔話の姿を追いかけたことになります。採訪で得た昔話が私の財産です。75歳になり「老いと死と口承文芸」というテーマができました。語りのなかに生命をたずねる最終コースということでしょうか。

